



Title	『狭衣物語』出典未詳表現覚書：「こゑの秋のかせは月みつことしきりなり」を取りあげて
Author(s)	小林, 理正
Citation	詞林. 2021, 69, p. 39-48
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/83605
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『狹衣物語』出典未詳表現覚書

——「この秋のかせは月みつことしきりなり」を取りあげて——

小林 理正

一、はじめに

『狹衣物語』の本文は激しく搖れ動く。それゆえ、その様相の把握は困難を極める。本文理解もまた、おびただしいヴァリアントのために一筋縄ではいかない。この状況はもはや贅言するまでもない。本稿で取りあげようと思うのは、『狹衣物語』にいくつか残される出典未詳表現である。特に『狹衣物語』卷三にみえる「この秋のかせは月みつことしきりなり」について検討する。当該表現は、古注釈書および通行する注釈書のいずれもが、その出典を未詳としている。実際、出典となる作品・資料が散逸しており、断片的にすら目にすることはできないならば、出典未詳とする理解も致し方ない。しかし、出典未詳とする見解が示されて以来、充分な検討が積み重ねられることはなく、出来合いの研究成果が安易に繼承されてきたきらいがあるよう思うのである。たとえば上原作和らによつて平安後期物語の漢籍を引用し

た表現が再検討および整理された⁽²⁾が、これは通行する注釈書の見解を一論稿にまとめたに過ぎず、従来説そのものを捉えかえそうとする野心的な試みがなされたわけではなかつた。また、『大系』の刊行以降 同書の底本と「同系」伝本を底本に採用した注釈書が軒並み、『大系』説に引きずられたかあるいはそれを継承したのか判断が難しいものの、その理解が固定化してしまつたようにみえる。このことは『大系』の犯した誤りと同趣の誤謬が後の注釈書に存在することからも窺い知られるであろう。既存の研究成果を踏まえること、および研究史を整理することは極めて重要であるし、基本的な事柄であるとさえ思う。しかし、中長期的な視座から研究史をみやるとき、先行研究群は暫定的な見解に過ぎないから、安易に依拠すべきものではない。ましてや先行論を批判的に読み解き、それらを乗り越えていかねば、研究そのものの意義が喪われてしまいかねない。『狹衣物語』研究は、ただでさえ錯綜する本文群のために通行する注釈書の提供する校訂

本文および解釈に依拠する傾向が強い。このような状況を打破しなければ、研究の進展は望むべくもあるまい。それゆえ、各論者が本文と向き合い、自ら本文読解・分析を行い、その見解を蓄積していくことが『狹衣物語』研究にいま求められていることだと思うのである。

今回注目する「この秋のかせは月みつことしきりなり」は、研究史上、取りあげられることがなかつた、いわば検討を放棄されてしまつた表現である。本稿は、当該表現の典拠論明に主眼を置くが、その検討過程で出典未詳表現およびその本文の問題についても触れ、他の出典未詳表現の検討⁽³⁾を視野に入れた方法論も探るつもりである。出典未詳表現の本文は、意味の取れない場合が多く、そのためか、いくつかのヴァリエーションを獲得しているケースがままある。それゆえ、異文にまつわる本文分析も合わせて行う必要があると考えている。

一、「この秋のかせは月みつことしきりなり」をめぐる文脈の整理

「この秋のかせは月みつことしきりなり」の一文がみえるのは次の場面である。以下、深川本に拠つて本文を掲げる。⁽⁴⁾なお、句読を切つたり、清濁を区別したり、鍵括弧を施したりするが、表記は原本のままとする。ただし、「この秋のかせは月みつことしきりなり」の一文は清濁を区別せず、そ

のまま記す。

○ 深川本・卷三・一二五丁表へ裏

中将、あふぎに、秋の、をかきて、かぜいたうふきたるに、もとあらのはぎに露をもげなる。しがらみかくるさをしかのけしきを、をかしくかきなしたるをみ給て、「この秋のかせは月みつことしきりなり」と書き給へるは

ざまに、ちゐさくて、

我かたになびけよ秋の野、おばなこゝろをよするか
せはなくとも

こゝろにはしめゆひをきしはぎのえをしがらみかく
るしかやなぐらん

「いつしかいもに」とかきすぎみ給へる、さまぐの御
ざへども、めもをよばぬに、「これすこしものおほえん
女などの、めとゞめぬはあらじかし」とみえたり。

「中将、あふぎに」とある箇所がやや読み取りづらい。た

とえば『全註釈』は「中将が、扇に秋の野を描いて、風がひどく吹いているところに、まばらに生えている萩にいかにも重そうな、(その秋を)足に絡める小牡鹿の気色をしみじみと趣深くなるように描いているのを(狹衣は)御覧になつて」(『全註釈』⑦・二六三頁)と読み解いている。しかし、この解釈では、狹衣との会話のさなか、どういうわけか宮の中将が扇に絵を描いていることになる。如何にも不審な解釈である。「中将、あふぎに」は「中将の扇に」と読み解き、「かき

ないたるを」は「かいてある（扇）を」と「あふぎ」が省略されないと判断し、秋の景物が描かれてある宮の中将の扇を狭衣が見たと解釈しなければなるまい。この解釈が、流布本などの本文世界に通じるものであることは、次に掲げる流

布本文を見れば、つぶさに知られる。

○ 承応版本・巻三之下・二五丁表裏

中将の扇に、秋の野をかきて、風いたうふかせたるに、もとあらの小はぎに露おもげなるを、しがらみふするさをしかのけしきも、おかしうかきなしたるを見給ひて、「声のあき風は月のみつことしきりなり」とかきたまへる、はざまごとにちいさくて、

我かたになびけよあきのはなす、きこゝろをよする
かぜはなくとも

心にはしめゆひをきしはぎの枝をしがらみふするし
かやなくらん

「いつしかいものが」と書すさひ給ひて、さまざまの御ざ

へといへど、めもをよばぬに、「これは、すこしもの見
しらん女などの、めどめぬはあらじかし」と見えたり。

なお、「中将あふきに」とあるのは深川本・武田本の二本であり、これを除けば諸本「中将のあふきに」とある。⁽⁷⁾ 中将が扇に描く」とする解釈は本文の諸相を確認しても見当たらない。

「こゑの秋のかせは月みつことしきりなり」の出典は未詳

とされ、いまだよく分からぬが、当該本文が置かれる文脈も実は解釈が定まってはいなかつたのである。

三、「こゑの秋のかせは月みつことしきりなり」のヴァリアント

「こゑの秋のかせは月みつことしきりなり」の置かれた文脈について前節では整理した。数ある注釈書の中の一部にだが、その解釈に誤りのあることが知られたわけである。だが、その差異の解消が本稿の主眼にあるわけではない。あくまでも「こゑの秋のかせは月みつことしきりなり」の出典を探る点にこそ狙いがある。そこで、以下、当該本文のヴァリアントを確認し、本文の諸相を整理する。なお、本文は既存の研究とは距離を置き、系統ごとに示すのではなく、書写年代ごとにまとめて表示する方法を採る。というのも、これにより検討本文が如何に変容したか、その本文揺動史の捕捉が可能となると考えるからである。

鎌倉期書写本群の「こゑの秋のかせは月みつことしきりなり」に対応する本文を掲げる。

【鎌倉期本文】

- ① こゑの秋のかせは月みつことしきりなり——深川本
- ② □□の秋風は月のみつことしきりなり（□□は判読不能字）——保坂本
- ③ こゑのあきかせは月のみことしきなし——慈鎮本

④ しゑの秋の風は月のみつことしきりなり——為明本
 ⑤ こへのし秋の風月のみつことしきりなり——松浦本
 ⑥ 呉苑秋風月の水しきりなり——為相本
 ⑦ ナシ——為家本

本稿における『狹衣物語』本文は主に深川本を用いる。それゆえ、①深川本の本文をひとまずの基準とし、ヴァリアントについて整理する。ただしこのスタンスが「深川本本文こそ原『狹衣物語』の形を正確に伝えていた」との判断に由来するわけでは決してない。深川本を「最善本」とする理解はいまなお根強くあるのかもしれないが、如上の見解は長谷川佳男および片岡利博の論稿からも明らかなようすに支持できるものではない^⑨。本稿で、深川本を取りあげることへの誤解なきよう、記して注意を促しておく。

以下、本文の諸相について確認する。②保坂本は深川本「こゑ」とあつた二字に相当する本文を欠く。この箇所には「こゑ」「しきり」「こへのし」「呉苑」といったヴァリエーションが認められるから、保坂本の欠字部がどのような形であったか確定できない。

③慈鎮本に「こゑのあきかせは」とあるのは①同様だが、「月のみことしきなし」と続く点に違いがある。この「月のみことしきなし」では意味がうまく取れない。「月のみつことしきなり」から「つ」と一つ目の「り」が落ちたか。「なし」とあるのは「なり」の「り」を「し」に書き誤ったのである

う。
 ④為明本の「しゑの」は、これでは意味をなさず、損傷を疑わざるを得ない。「こ（己）」と「し（之）」の字形類似による誤写が予測される。

⑤松浦本は「こゑの」が読み解けなかつたのか、「し」を加えたうえに「ゑ」を「へ」に変え、「こへのし」なる本文を作る。しかし、「こへのし」が何を意味するかは不明である。損傷していると考えるべきであろう。

⑥為相本は「こゑの」とある箇所を「呉苑」と漢字で表記する。「こゑの」を「ごゑんの」の撥音を無表記としたものであると判断したか、あるいは「こゑの」と「月」が共起することから『和漢朗詠集』落葉に採られる、後中書王の「逐夜光多吳苑月」¹⁰ 每朝声少漢林風（夜を追つて光多し吳苑の月朝毎に声少なし漢林の風）を連想し、「呉苑秋風月（の水しきりなり）」との表記を生じさせた可能性などが考えられもあるが、いずれの場合に因る異同なのか詳らかにできない。他の鎌倉写本群が仮名で表記する中、「呉苑」と漢字で記し、解釈を限定するが如き表記を取る向きが存在したといふ事実は本文史上無視できるものではない。

最後に、⑦為家本についてだが、同本は当該本文を有しない。この状態は当該本文を持たない本を親本としたことに因ると思しい。「こゑの秋のかせは月みつことしきりなり」があつたと疑われる箇所に「★」を私に施したうえで、為家本

本文を掲げ、説明しようと思う。

○ 為家本・卷三・一二九丁表～一三〇丁表

中将のあふぎに、秋の野をかきて、風いたくふかせたるに、もとあらのこはぎに露おもげなる、しかみかくるさおしかの氣色、おかしくかきないたるをみ給て、★かい給えるさまにちむさくて、

我かたになびけよあきのはなす、き心をよするかぜはなくとも

心にはしめゆひをきしはぎのえをしがらみかくるし

かやなくらん

「いつしかいもに」とかきすさみ給える。さまざまの御ざえども、めもをよばぬに、「これすこし物おぼえん。

為家本の叙述では「かい給える」の目的語が記されておら

ず、言葉足らずな感がある。少なくとも、中将の扇に描かれた秋の景物を見て、狹衣は「何か」を書いたことは間違いない。この「何か」が諸本では「こゑの秋のかせは月みつことしきりなり」に相当するのである。為家本本文は目的語を欠いており、このままでは解釈できない状態である。そのうえ、目移りが疑われる文字列もなく、当該本文の字数分に相当する空白も有しない。それゆえ、為家本が「こゑの秋のかせは月みつことしきりなり」を持たないのは、同本の親本の段階で既に当該本文が無く、その状態を継承したためと予測され

る。

次は室町期以降の本文群からいくつか取りあげ、その諸相を整理しておこうと思う。ただし、室町期・近世期伝本はおびただしい数あり、その全てを参照することは現実的ではないから、特徴的なヴァリアントを『校本狹衣物語 卷三』(三九八頁)および適宜影印等を確認し、まとめる。なお、掲出しなかつた伝本も数多いが、以下に示すヴァリアントの中にいずれもほぼ収ることを確認している。

【室町期・近世期本文】

① すこしの秋風八月の夜にしきり也——京大五冊本

② こしのあきかせ八月のみつことしきりなり——内閣

本

③ このゑの秋かせは月のみつとしるきなり——紅梅文

庫本

④ 声のあき風は月のみつことしきりなり——承応版本

⑤ ナシ——蓮空本・九大細川本

① 京大五冊本は「すこしの秋風八月の夜」とある点が異なる。「すこしの」とあるのは「こゑの」では意味が取れず、何とか読み解こうと苦心した末、これを「こしの」を誤ったものと判断したうえで「す」を加え、「すこしの秋風」との解釈に至つたことに因るものか。「夜にしきり也」との異同も認められるが、これは先に確認した為相本のごとく「水しきりなり」とあつた本文を書き誤つたことで生じたヴァリア

ントであろう。たとえば蓮空本とその転写本である四高本の間で【水】と【夜】の誤写例が報告⁽¹⁾されているよう、その草書体は書き誤られやすいもののようにある。したがって、京大五冊本における「夜しきり也」との異文が誤写から派生したとの想定は充分あり得る。なお、「秋風八月」とあるのは「は」の字母が「八」とあつた親本を利用したか、あるいは書写者の書き癖のために「は（八）」を「八」としか読めない字で記してしまつたことに因るか。このように判断すれば、当該本文は損傷していると考えねばならないが、「すこしの秋風八月の夜にしきりなり」との異文は、僅かな秋風が八月の夜に頻りに吹いたと読み解くことができ、安易に損傷本文であると言い切れない。ここに京大五冊本独自の本文世界を認める必要があるかもしれない。

②内閣本は「こしのあきかせ八月のみつことしりきなり」とある。「こしの」は「こそ」の「そ（恵）」を「し（志）」と誤写したことで生じたか。「八月のみつこと」が「しりきなり」とある点、このままでは解釈できない。「八月」とあるのは①京大五冊本と同様の要因が考えられる。「しきり」の語順が逆転しているのは、書写のさい語順が入れ替わってしまったのである。③紅梅文庫本は「このゑの秋かせは月のみつとしるきなり」とある。「このゑの」および「しるきなり」では意味をなさない。「このゑ」は「近衛」など漢字を宛てることもできるが、それでもその意味はよく分か

らない。「このゑの」をめぐる理解が定まっていないことで生じた異文と考えられる。「しるきなり」は「しきり」の語順が逆転したうえに「り」と「る」が書き誤られたと思しい。

④承応版本は「声のあき風は月のみつことしきりなり」とあって、「こその」を「声の」と表記する。漢字表記という観点からいえば、「吳苑」とあつた為相本との違いが鮮明である。如何なる要因で「声」と漢字を宛てたのかは現時点では詳らかにし難いが、そこにヴァリアントが生まれる力あるいは本文の動態を看取することができるかもしれない。この点に関する検討は、今後の課題としたい。

⑤蓮空本は当該本文を有しない。先述した為家本と同様の事由により備えないと予測されることは、次の本文をみれば明らかである。

○ 蓮空本・巻三・一七二頁

中将の扇に、秋の野をかきて、風いたくふかせたるに、もとあらの萩に露をもげなるを、しがらみかくるさをしか、けしきおかしくかきなひたるをみ給て、★かき給へるはざまにちいさくて

わがためになひけよ秋のしのすゝき心をよする風はなくとも

心にはしめゆひをきし萩のえをしがらみかくるしか

やなからん
「いつしかいもに」とかきすさみ給へる、さまぐの御

まへどもめもをよばず、「これをすこし物思らん女などの、めとめぬはあらじかし」とみ給ふ。

「ここまで鎌倉期から室町期・近世期本文の確認をつうじて「この秋のかせは月みつことしきりなり」の諸相を整理してきた。それらをみるかぎり、当該本文が本文史上、大きく揺れ動かないものであつたと知られる。もちろん、ヴァリアントの中には京大五冊本のように独自の物語世界を形作つてゐる可能性の拭いきれないものが存在することは注意せねばならない。

四、「この秋のかせは月みつことしきりなり」の典拠

「この秋のかせは月みつことしきりなり」の諸相を確認したが、その典拠について考へるにあたつて参考になるかと思われるものは、やはり「吳苑秋風」との表記例を有する為相本であろう。承応版本も「声の秋風」と漢字を宛てるが、これは問題にならない。というのも、漢詩句は七言詩であれば二字・二字・三字（あるいは四字・三字）で語句を句切ることができると、五言詩では二字・三字で句切るのが一般的である。だが、承応版本の本文は七言詩および五言詩の訓み方、そのいずれにも合わないのである。その一方で、為相本表記は「吳苑秋風」とあり、「吳苑」「秋風」と二字・二字で句切ることができる。つまり、七言詩の一節であると推定できるのである。七言詩の一節であるとの見通しが立てば、典拠と

して指摘しうる詩句も相当に絞られてくる。それこそ、『狹衣物語』以前に成立した『千載佳句』や『本朝麗藻』などの七言詩を収める漢詩集は調査が必要となる。そこで「吳苑+秋風」の用例を上述の資料から搜すと、『千載佳句』に、次に掲げる晚唐・許渾の「題武丘僧院」の一節を見つけることができた。いま『千載佳句』諸本の中でも最古写本（鎌倉期写）と目される歴博本を用い、その本文を掲げる。¹³なお、当該本に付された訓点を基にする私訓を丸括弧内に入れて示す。

○ 国立歴史民俗博物館蔵本『千載佳句』・上巻・一五丁裏

秋夜・一六三

荆溪夜雨花飛疾（荆溪の夜雨は花飛ぶこと疾し）

吳苑秋風月満頻

（吳苑の秋風は月満つこと頻りなり）

摘句される詩句の一節「吳苑秋風月満頻」は「吳苑の秋風は月満つこと頻りなり」と訓むことができる。その本文をみるとかぎり、「吳苑秋風」は為相本の表記と一致するし、「月満頻」が「月みつことしきりなり」とあつた諸本本文と同様に訓み下せる点、注目せられる。右の許渾詩句と「この秋のかせは月みつことしきりなり」の一一致度を思えば、当該詩句を典拠として認めてよいと私は思うのだが、軽々に結論づけるわけにもいくまい。そこでいま一度、「この秋のかせは月みつことしきりなり」の置かれる文脈を整理したうえで、掲出許渾詩句を典拠と認めるか考えていただきたい。

「この秋のかせは月みつことしきりなり」と記した扇は、

「秋のゝをかきて、かぜいたうふきたるに、もとあらのはぎ
に露をもげなる、しがらみかくるさをしかのけしきを、をか
しくかきないと」（深川本）ものであつた。「吳苑秋風」と
ある箇所は地の文中の「秋のゝをかきて、かぜいたうふきた
るに」と合致する。また、宮の中将とのやりとりは夜であつ
たから、「秋夜」に配列される許渾詩を狹衣が扇に書き付け
たとしても、その行為はむしろ当意即妙ですらあり、不審が
あるとは言い難い。——狹衣が、秋の景物が描かれた扇に「秋
夜」のことを詠うと理解される許渾詩を書いたと解釈するこ
とに問題はないのである。この「吳苑秋風月満頻」は、『吳苑
の秋風は吹き渡り、月は幾度も満ちていく』などと読み解か
れる詩句であり、時の経過をいうものと思われる。この点、「い
つしかいもに」とあつたことと関係するか。また、秋の景物
と当該詩句の「はざまに、ちゐさく」記した和歌「我かたに」
歌の結句が「風はなくとも」とあるのは、吳苑には風が吹く
けれども、私のいるこの場には風が吹かない、といったこと
を言わんとしたものか。このように許渾詩を引く当該表現が
後続本文の理解に影響していると見るべき事例もある。

「この秋のかせは月みつことしきりなり」の典拠は許渾
「題武丘僧院」の一節であると判断しても、その文脈上、問
題ないことは明らかである。

五、おわりに

ここまで「この秋のかせは月みつことしきりなり」の典
拠について検討を加えてきた。その結果、同表現の典拠は『千
載佳句』収録の許渾詩句であるとの見解を得た。この『千載
佳句』は『和漢朗詠集』成立に絶大な影響を与えた佳句集で
ある。『和漢朗詠集』との間に共有する詩句も多い。それゆえ、
『狹衣物語』における漢詩句を引用する表現の典拠を探るう
えで、『千載佳句』は当然参考される資料として位置づける
ことができる。しかし、『狹衣物語』研究史上、『和漢朗詠集』
ばかりに視線が注がれ、『千載佳句』をはじめとする他の本
朝で編まれた漢詩集を検討する視座が欠けていた。それゆえ
に、たとえば『新全集』や『全註釈』のごとく『千載佳句』
の書名を出しておきながら、「この秋のかせは月みつこと
しきりなり」の典拠を「出典未詳」とする注釈書などが出現
してしまったのであろう。もちろん『狹衣物語』における
漢詩句引用のほぼ全てが、大谷雅夫が『出典未詳表現の典拠を
『本朝麗藻』所収詩であると明らかにした事例¹³⁾を除けば、『和
漢朗詠集』所収詩であるから、如上の状況にも一応の理解を
示すことはできる。だが、だからこそ、各研究者は『和漢朗
詠集』ばかりを検討してきた研究史を批判的に見つめ、さま
ざまな資料を調査しなければならなかつた。どれほど詳密な
注を完備したテキストであろうと、その理解は刊行時点にお

ける見解に過ぎない。「この秋のかせは月みつことしきりなり」が長らく出典未詳表現であり続けたのは、研究者らの他人任せな研究態度に因るところが大きいと思えてならない。

『狹衣物語』本文は錯綜している。この理解を否定するつもりはない。だが、片岡利博による一連の本文研究¹⁶⁾において示されたように、おびただしいヴァリアントは資料にこそなれ、研究上のネットとなるものではないのである。出典未詳表現や意味不通本文のみならず、作品読解を試みるうえで、本文の諸相、および変容過程の輪郭を読み取ること——本文揺動史の把握を行う必要があるだろう。いま支持される本文理解を捉えかえすためにも、我々は改めて本文の有り様を直視しなければならない。

【注】

- (1) 本稿では、以下に示す注釈書を確認している。以下、略称に続けて書名を記す。「有朋堂」——「有朋堂文庫」(有朋堂書店、大正一〇年)。「全譯」——吉澤義則「全譯王朝文学叢書 狹衣物語下」(全譯王朝文学叢書刊行会、大正二三年)。「大系」——三谷榮一・閑根慶子「日本古典文学大系 狹衣物語」(岩波書店、昭和四三年。第三刷)。「全書」——松村博司・石川徹「日本古典全書 狹衣物語下」(朝日新聞社、昭和二年)。「集成」——鈴木一雄「新潮日本古典集成 狹衣物語下」(新潮社、昭和六一年)。「新全集」——小町谷照彦・後藤祥子「新編日本古典文学全集 狹衣物語2」(小学館、平成二三年)。「全註釈」——「狹衣物語研

究会編『狹衣物語全註釈Ⅶ』卷三(下) (おうふう、平成二五年)。

- (2) 上原作和・伊藤禎子・勝亦志織「平安後期物語引用漢籍總覽」——「浜松」「寢覚」「狹衣」編——「懷風藻研究」第九号、平成二年五月) および上原作和「『狹衣最秘鈔』——『狹衣物語』引用漢籍註疏稿」——平安文学論究会編『講座 平安文学論究』第十六輯(風間書房、平成二四年)。

(3) いまなお出典未詳表現として、その解説が俟たれるものに巻一にみえる「すにみてり」「をとはの山には」「めくりくる」といったヴァリエーションを備える例がある。当該例についての検討は稿を改めて行う。

- (4) 吉田幸一編『古典聚英 狹衣物語下』(深川本) (古典文庫、昭和五七年) に拠る。以下、深川本本文はすべて同書に拠つて掲げる。

(5) 『新全集』の解釈は『全註釈』と同様である。深川本を底本とする注釈書間でその本文理解が継承されていると思われる。

- (6) 本文は、三谷榮一「平安朝物語板本叢書2 狹衣物語(下)」(有精堂、昭和六一年)に拠る。

(7) 中田剛直「校本狹衣物語 卷三」(桜楓社、昭和五五年)を利用した。なお松井本には「中将のけふきに」とあって「け」をミセケチとした上で「あ」を書き加える異同があるので、私解を否定するものではない。

- (8) 深川本を除く、本稿で参考した鎌倉写本は以下のとおりとなつていて。伝本名を掲げたのち、その出典を記す。保坂本・慈鎮本・為明本——「狹衣物語諸本集成」(笠間書院)。為秀本——「静嘉堂文庫藏物語文学書集成」(雄松堂マイクロフィルム)。松浦本——天理大学附属天理図書館デジタルプリント。為相本——紙焼

き写真。為家本——『古典聚英 為家本』（古典文庫）。

飛疾」とあること、申し添えておく。

(9) 長谷川佳男「卷一、第一群と第三群の関係——構造的本文批

題『蘇州武丘寺僧院

評の試み——」（同『平安朝物語・本文の科学』笠間書院、令和

二年三月。初出は昭和六三年）片岡利博『異文の愉悦 狹衣物

語本文研究』（笠間書院、平成二五年）収録の一連の論稿。

(10) 引用は、菅野禮行『新編日本古典文学全集 和漢朗詠集』（小

学館、平成二一年）に拠る。

(11) ヴァリアントの確認には主に『校本狹衣物語』を用いたが、

影印を確認できた伝本については、そのかぎりではない。以下に

示す伝本は別途本文を確認している。略称に続けて、その出典を

示す。京大五冊本——紙焼き写真。紅梅文庫本——『狹

衣物語諸本集成』（笠間書院）。承応版本——三谷榮——『狹

衣物語本叢書2 狹衣物語（下）』蓮空本——『古典文庫』（古典

文庫）。

(12) 美谷一夫『金沢大学図書館蔵（四高本）「さころも」について

(一)』（『学葉』三六卷、平成六年二二月）において、既に【夜】と【水】の誤写例が指摘されている。

(13) 引用は『国立民族学博物館藏貴重典籍叢書 文学篇第二卷（漢詩文）』（臨川書院、平成一三年）に拠る。

(14) 「千載佳句」に採られる許渾「題武丘僧院」の詩句は頷聯のみであり、その全容は記されていない。それゆえ、許渾の詩集『丁卯集』に拠つて当該詩全体を掲げることとする。引用は『丁卯集』（台湾中華書局、昭和四三年）を利用して、返り点は私に付し、頷聯には網掛を施す。なお、「全唐詩」卷五三四、『文苑榮華』卷二三〇にも当該詩は収録されているが、そこには若干の異同が認められる。「全唐詩」には「花開作飛疾」とあり、「文苑榮華」には「花

【附記1】

本稿は日本学術振興会特別研究員研究奨励費（課題番号・19J1542）の助成を受けた研究成果の一部である。

【附記2】

昨年、急逝なされた加藤洋介先生のご靈前に本稿を謹んで捧げます。先生のご冥福を改めてお祈り申し上げます。

（こばやし・ただまさ 本学博士後期課程）

暫引「寒泉濯遠塵」此生多是異郷人
荆溪夜雨花癡疾 親苑秋風月滿頻
万里高低門外路 百年榮辱夢中身
世間誰似「西林客」 一臥煙霞四十春

(15) 大谷雅夫「道をうづむ花」（『歌と詩のあいだ』岩波書店、平成二〇年）。
(16) 注(9)掲出片岡著書に同じ。